

Title	宋雲彬と許志行を思う
Sub Title	To the memory of my old friends Song Yunbin and Xu Zhixing
Author	王, 凡西(Wang, Fanxi) 長堀, 祐造(Nagahori, Yuzo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.39 (2007.),p.182(47)- 210(19)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	図4削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20071220-0182

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宋雲彬と許志行を思う

王 凡 西 著
長 堀 祐 造 訳・解題

〔訳者解題〕

一．テキストの問題について及びその他

本稿は中国トロツキー派指導者の一人、王凡西（一九〇七～二〇〇二。浙江省海寧県硤石鎮生れ。なお、海寧県は一九八七年に廃され、海寧市が設置された）が一九八四年四月に書いた文章の翻訳である（著者王凡西については本紀要No.33所載同著者による文章の拙訳稿「胡風遺著読後感」〔訳者解題〕を参照いただきたい）。

まず、テキストの問題であるが、本稿の中国語テキストは王凡西氏の長男王宇平氏（海寧市在住、王凡西と最初の妻との間の子。王凡西の『双山回憶録』（後掲）の第六章「回国工作―被逐出党（帰国後の工作―党を逐われる）」末尾の記載によれば、氏は一九三〇年生れということになる）が、浙江省海寧市政協の資料中から発見したものである。そのテキストを元中国海洋大学（在青島）化学系教授張曼平氏（一九四五年生、一九六八年北京大学化学系卒、一九八三年北京大学理学博士、専門は海洋化学）が香港のマルクス主義研究促進会が刊行しているニュース・レター「通訊」第二五号のために電子媒体に打ち込んで送り、訳者は当該「通訊」所載テキストでこの文章の存在を知った。しかし、正確を期すために、ここでは張曼平教授から直接提供を受けた海寧市政協版テキスト（王宇平氏がコピーしたものを写した写真）によることとする。このテキストによれば、本文の初出は香港の雑誌ということである。「開放」か「中報」あたりではないかと思うが残念ながら現地での調査ができていない（「九十年代」、「争鳴」、「明報月刊」の一九八四年から数年間分のバックナン

バーは調査したが掲載された形跡はない)。そこで、削除部分があつて完全版でないことはわかっているのだが、現時点ではこのテキストに従うほかない。王宇平、張曼平の両氏に感謝したい。

海寧市政協が王凡西の文章を転記、保存していたのは、張曼平教授が訳者への書信で言う如く、著者がトロツキストとはいうものの、海寧出身者による同郷の著名人宋雲彬と許志行を記念する文章であつたためと考えるほかない。

ここで、張曼平教授の父親、張維良についても簡単に触れておかなければならない。張維良は浙江慈溪の人、一九一六年生れ。一九三〇年代初めに上海でトロツキー派組織に参加、一九三九年からは重慶に赴き、書店経営、印刷事業などの活動を担い、西南地区トロツキー派組織の指導者となつた。解放後の一九五二年十二月二日、全国で一斉に行われた中共によるトロツキスト検挙によつて逮捕され、十二年の労働改造の処分を受け、四川省西昌で服役中の一九五八年、病気で獄死した。張教授とその家族のその後の境涯は香港マルクス主義促進会「通訊」第二期所載、張曼平著「關於父親張維良的一些回憶（父張維良についてのささやかな思い出）」、同第二期所載、弟の張曼青著「我在『托派子女』的陰影下成長（『トロツキー派の子』という暗影のもとで育つて）」に詳しい。張教授は現在、中国海洋大学を定年退職し、中国トロツキー派の歴史的研究と復権問題に取り組んでいる。ついにながら、本塾文学部非常勤講師呉敏氏は張教授の姪にあたる。訳者の研究を知つた張教授が呉氏を通じて連絡をくれ、私たちの間に通信回路が開かれた。あわせて呉氏にも感謝する。

二、宋雲彬と許志行の為人

さて、本文で王凡西が追悼する二人の同郷の人物、宋雲彬と許志行について、簡単に紹介しておこう。

宋雲彬、一八九七年八月一日〜一九七九年四月一七日。浙江海寧硤石の人。文学史家、作家、編集者、学者。五四期に新思想の影響を受け、革命的文化活動を開始。一九二〇年代初め、「杭州報」、「浙江民報」、「新浙江報」などの編集者となる。一九二四年中共入党、広州黄埔軍官学校で「黄埔日報」の編集にあたる。のち、中共の設立した「国民通信社」社長。一九二七年武漢に行き、「民国日報」の編集者となる。蒋介石の四・一二クーデタ後、国民党左派の汪精衛が七月、武漢で「分共」（中共との訣別）を宣言すると、牯嶺を経て上海に行き一時地下に潜行、中共との連絡を失う。この時期の宋雲彬については、茅盾の短編小説（「牯嶺之秋」の雲郎）や短文（「雲少爺」わかだんな）

与草帽」とむぎわらぼうし「牯嶺的臭虫」のなんきんちし）、さらには回想録に描写がある。¹⁾翌一九二八年、開明書店に入り、『開明國文講義』や雑誌「中学生」の編集に従事した。一九三七年の抗日戦開始後、武漢で郭沫若指導下の軍事委員会第三政庁で活動、武漢陥落後は桂林で中共南方局が設立した文化供应社出版部主任、桂林師範大学教授となり、同時に夏衍、聶紺弩らと雑誌「野草」を編集して自らも多くの文章を書いた。抗日戦勝利後、中国民主同盟機関誌「民主生活」を重慶で編集。その後、香港に行き、香港文化供应社総編輯となり、一九四八年当地で「文匯報」を復刊、同紙の「青年週刊」主編となり、達徳学院でも教鞭を執った。

新中国成立前夜、北京に入り、第一回全国政治協商会議に出席（第一、三、五期同会議委員）、のち、華北人民政府教育部教科書編審委員。新中国成立後、出版総署編審局処長、人民教育出版社副総編輯。

一九五一年、浙江に戻り、省政府人民委員、省政協副主席、省文連主席、省文史館館長などを務めたが、一九五七年、反右派闘争時期には右派とされた。この間、第一回全国人民代表大会代表（一九五四～一九五九）。一九五八年、北京に戻され、中華書局編集者となり、『二十四史』の『史記』、『後漢書』の評点・校正の仕事に従事。北京大学で古典文献の授業も受け持った。一九六〇年に右派のレッテルは外されたが、文革中の一九六九年には湖北咸寧の五七幹部学校に下放、翌年病気のため帰京。一九七九年二月、右派とされたのは誤りとして正式に復権するも、四月、病気のため死去した。

主著に、『東漢之宗教』、『王守仁与明理学』、『明文学史』、『玄奘』、『魯迅語録』、『中国文学史簡編』、『中国近代史』、『康有为』、『宋雲彬雜文集』、歴史小品集『玄武門之變』、日記『紅塵冷眼』など。²⁾

許志行、一九〇二年五月二日～一九八三年十月十一日。江蘇吳県洞庭東山の人。作家、教師、編集者。七歳の時、父に従い浙江海寧の袁花鎮に移る。旧姓は潘。幼年期の経歴については王凡西の本文と重なるが、父の働く商家の跡取りとなるべく、許姓となる。長じて、浙江嘉興、上海、湖南長沙の各地に、旧時日本の所謂「雅奉公」に類する見習いに出されるが、堪えられずに逃亡を繰り返した。一九一九年、十七歳の時、五四運動の洗礼を受け、長沙の金属・ガラスを扱う店から逃げだして、徒歩で漢口まで来たとき、たまたま湖南学界の代表として北京に軍閥駆逐の請願に行く途中の毛沢東と出会う。毛沢東は許志行の境涯に同情し、実家までの汽車代を与え、進学を望む

許志行に、いずれ教育の機会を与えることを約束する。ほどなく、湖南省立第一師範附属小学校主事（校長）となった毛沢東は海寧に戻っていた許志行を呼び寄せ、小学校中退者が中学進学を目指す補習クラスを設置、ここに志行を入れた。許志行は毛沢東一家から家族同然に遇された。長沙で二年弱学んだ後、許志行は学費免除の湖南省立師範学校への進学を希望したが、本省人の入学しか認められなかったため、やむなく浙江に帰り、杭州の浙江省立第一師範に入学する（後年の許志行の小説「別長沙的一天（長沙を離れる日）」に出てくるM先生は毛沢東がモデルで、長沙を離れる時のことが書かれている）。この間、すべての経費は毛沢東が負担したという。許志行はここで三年半ほど学ぶが、この時すでに革命組織に参加する一方、同師範の国文教師で後の大学者にして毛沢東文芸路線の批判対象ともなる俞平伯の激励を受け、小説を執筆、「小説月報」誌上に発表した。一九二五年、上海で五・三〇事件が起こると、当地に赴き反帝運動に参加、中共に加入する。やがて学生運動を理由に師範学校からも除籍処分を受けた許志行は、当時広州の国民党中央宣伝部で活動していた毛沢東の勧めで広州に行き、そのもとで働くこととなった。北伐の進行にともない、毛沢東に帯同して一時武漢に行くも、一九二七年の上海クーデタとその後の汪精衛の「分共」後は上海に行き、編集者、教師となる。この間、共産党との関係を失う。一方の毛沢東は湖南に戻って農民運動の指導に当たり、以後、二人の関係は三十年以上断絶した。

一九二八年、許志行は廈門集美中学、汕頭友連中学で教鞭を執る傍ら、小説集『孤墳』（亜東図書館、一九二九年。俞平伯の序を付す）を出版、その中の一編「師弟」は茅盾によって五四以降の十年を代表する作品の一編として『中国新文学大系・小説一集』（上海良友印刷公司、一九三五年）に収められた。その後、河北定県、浙江温州などで教師生活を送り、一九三五年の一二・九運動で逮捕、出獄後は上海の開明書店などで編集の仕事につく。一九三六年、中国文芸家協会に加入。ルポルタージュや小説を書いた。その後は上海で長らく中学の国語教師を務めた。

解放前夜、北京に来た毛沢東に、許志行は上海から手紙を書く。毛沢東の返信は上海解放後にやっと許志行のもとに届き、三十余年の音信不通状態が終わる。毛沢東はこの昔なじみの弟分を一貫して厚遇した。

解放後の許志行は、中国作家協会に加入、中国民主同盟にも参加。上海外国語学院、上海師範大学などでも教えた。作家としての代表作に、『孤墳』ほか、短編「揚州夢」「油瓶」、長編「前奏曲」などがある。

三、本稿が語ること

王凡西は一九二五年北京大学預科に入学、まもなく、中共に参加、一九二七年の四・一二クーデタ後は党の指令でモスクワのクートベに留学する。容易に想像しうることながら、北京大学時代の友人、知人たちの多くがその後の歴史に名を残す。また、ソ連留学中、トロツキストに転じ、一九二九年秋の帰国後は、トロツキストであることが発覚して除名処分を受ける一九三〇年春まで、周恩来のもと、中共中央組織部にあつて党の工作に当たっていた。当然、中共草創期の著名人とも密接な交流があつた。本稿が語るのは、北京大学時代以前のいわば革命家王凡西の「前史」に当たる杭州の中学時代に知り合いとなり（もつとも許志行はそれ以前からの「幼なじみ」であると、回想録にはある）、その後も友誼を保ち続けた二人の親中共の友人、宋雲彬と許志行の最期を知つての回想と感慨である。宋雲彬、許志行はともに、王凡西の先輩に当たる中共黨員である。一九二七年の大革命敗北後の二人の生涯における党籍の有無や変化は詳らかにしないが（ある資料によれば、少なくとも許志行は復党申請をしなかつたようだ。宋雲彬は中国民主同盟員になり、共産党に戻らなかつたよ）だが、民主党派の黨員が共産黨員でないとは限らないので断定はできない）、ともに非トロツキー、親中共という政治的立場は一貫している。ここで王凡西が語るののは、詰まるところ、政治的には非トロツキー・親中共でありながら、二人が示したトロツキスト王凡西に対する変わらぬ友情に人間としての「品位」を見るところであろう。ある戦後派作家は「政治の幅はつねに生活の幅よりも狭い」と喝破したが、個人が選択した政治路線が個人の生活の全領域、全人格を規定することなどありえないのは当然であろう（ここでは、政治路線的に正しい人がつねに「人格者」とはかぎらないし、政治的には間違いが多くとも優れた作家はいた、などということを示すれば足りようか）。そうした自然を否定する政治体制が、ファシズムでありスターリニズムであるとも言えるわけだが。

さて、宋雲彬は略歴でも紹介したとおり、左翼ジャーナリズム、作家、文学研究者として活躍した人物である。中共党史や現代文学史を研究する者にとってはそれなりに馴染みのある名前である。文学方面では茅盾との関わりが深い。不幸にも反右派闘争で右派とされ、文革でも辛酸をなめることとなるが、その素地は、王凡西がここで描く、一九二〇年代末から一九三〇年代における彼の行動と性格のうち認めることができる。一九二七年の国共合作失敗後、「途方に暮れ」た茅盾と宋雲彬は一時牯嶺に行き、「思索、観察し、分析する時間を必要とした」（「内はいずれも本文から）。茅盾、宋雲彬の革命に対する態度の違いに関する王凡西の指摘は面白い。茅盾のこの

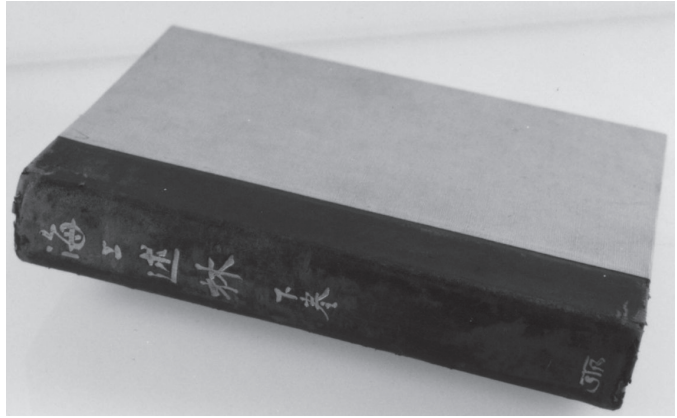


図1 魯迅が国民党に処刑された友人瞿秋白のために病を押して自ら編み、出版した翻訳遺稿集『海上述林』(上下)の背革天金の豪華本。写真は下巻。内山書店を通じて東京で印刷、製本された。

時の牯嶺行きは、茅盾文学のみならず、中国現代文学史にとっても大きな分岐点であるが、かつて創造社に傾倒する文学青年で、北京大学時代、同郷の徐志摩とも知り合っていた王凡西はそうした文学史的認識をも持った上でこの文章を書いているはずである。

ついでに魯迅と宋雲彬の関係を見ておくと、『魯迅全集』には宋雲彬が三度登場する。まず『三閑集』所載の短文「鐘樓にて」。一九二七年一月、広州中山大学に移った魯迅はこの「大鐘樓」で二ヶ月ほど暮らす。同年十二月に発表されたのがこの文章である。

当時、同じく広州で「黄埔日報」の編集に当たっていた宋雲彬は、一九二七年二月、広東の「国民新聞」副刊「新時代」に「魯迅氏はどこに隠れたのか」という文章を発表、広州に来て以来、鋭い筆鋒を収めたかに見える魯迅を暗に批判、闘いを慫慂した。そこで魯迅が「鐘樓にて」の一部でこれに軽く反論を試みているのである。⁶この両者の文章は上海クーデタ、武漢「分共」を挟んで発表されているので、読みには注意がいるだろう。その他は『魯迅日記』と『魯迅書信』に一回ずつ。「日記」の一九二

八年二月二六日の条に「宋雲彬より手紙」とある。「書信」の方は、魯迅死去の直前と言っている一九三六年十月二日付章錫琛宛の書信。魯迅が病を押して編集に尽力した瞿秋白の翻訳遺稿集『海上述林』の背革天金の豪華本を章、葉聖陶、徐調孚、宋雲彬、夏丏尊に送る旨を記す。開明書店創立者の章はこの遺稿集出版に協力した。一九二八年以来、同書店の編集者だった宋雲彬も何らかの協力をして魯迅から一定の尊重を受けたことを示すものだろう。

ここでもう一点注目すべきは、王凡西が一九三〇年代、トロツキストとして国民党の獄に繋がれた際の（国民党にとってトロツキープは共産党内の分派でしかない、つまり同じ「共匪」である）、宋雲彬の様々な支援である。親スターリン、反トロツキーの立場の宋雲彬

が、同郷とはいえトロツキー派の王凡西を、かくも厚く遇し得たのは、王凡西が他でいうようなことを例証している。

曰く「中共党員のトロツキー派に対する関係は一貫して敵対的だったわけではなく、また一致して敵対したのでもなかった。スターリン主義の立場から、彼らは無論トロツキー派に反対しなければならなかったが、少数の人は双方の意見を知りつつ、意識的にスターリンの側に立った。陳紹禹〔王明〕長堀注、以下同〕一派のようなごく少数の者だけが、トロツキー反対を重要な政治的資本としたのである。多くの党員はこの闘争「トロツキー―スターリン間の闘争」を重要視せず、それを主としてソ連内部のこととみなした。旧世代の共産党員のうち多くは、スターリンが勝手に一人で捏造してトロツキー派に加えたデタラメな罪名を本気で信ずるはずはなく、彼らは最終トロツキー派は依然として共産主義陣営内の革命家であると信じていたのである」と。^⑦

そして、スターリン主義者が国家権力を掌握していなかったこともここに付け加えなければならぬだろう。

許志行は作家としてまず歴史に登場すると言っている。略歴に紹介したように許の小説は茅盾編の『中国新文学大系・小説一集』に収められるが、ちなみにこの『小説二集』の編集は魯迅であった。これは一九三〇年代において、許志行が五四時期を代表する作家の一人と見なされたことを意味する。

許志行の位置は特異なもので、毛沢東との関係はきつても切れない。このことは許志行にとって正負両面の意味を持ったことは想像に難くない。正の方はさておき、負の方面を言えば、毛沢東の関係は解放前においては自身への国民党の弾圧の危険性をいやが上にも高め、「毛主席」が皇帝に等しい存在となつていった解放後は、他者からはつねに毛沢東の光背を背負った存在として、好奇の眼で見られることは避けられなかったろう。いずれにせよ、許志行が毛沢東との関係をひけらかさなかったのは、王凡西が言うように、その人柄の謙虚さと同時に、政治的な配慮もあつたであろう。

許志行への援助に見られる若き革命家毛沢東の人道主義的エピソードはなかなか感動的である。解放後、反右派闘争開始直後に、毛沢東が許志行を北京に招待した際、自分の故郷であると同時に、許志行にとっても思い出の地、韶山に行くように勧めて原稿料から五百元を贈る話も印象的だが、このとき二人は、「若くて貧乏で無名」だった昔をどんな風に回想したのか、あるいはまたそうではなくなっ

た「今」をいかに語り合ったのか。この許志行の北京訪問は現在の資料では反右派開始直後ということになる。とすると時期的に、許志行がこの時、亡命中の王凡西の帰国問題を毛沢東に掛け合せて、本人あるいはその周囲から肯定的感觸を得たと考えるのは難しいとも思われるが、許志行は昔なじみの身分で、ちょうどこの時、批判の鋒が向けられていた宋雲彬をかばう発言を毛沢東にしたというから、王凡西のことに持ち出しても不思議ではない。その結果が、許志行の王凡西への帰国呼びかけの言付けへと繋がった可能性は捨てきれないのである。だとすれば、許志行の政治判断は甘かったと、今から見れば言わざるを得ないのだが。

宋雲彬と同様、許志行も一九三〇年代、トロツキスト王凡西の生活の面倒を見ることを厭わなかった。このことも、上述のような、一般の中共党員の対トロツキー派認識を示すものであろう。

歴史には「人を得る」ことが求められる。本稿を読むと、王凡西という人物の歴史における位置が、様々な人間関係のうちに、自ずと示されているという感を強くする。毛沢東の家で家族同様に暮らした経験をもつ許志行がやがて、広州、武漢で王凡西とも同居することとなり、さらにその後、中共（そのもの）とトロツキー派と、違う道を歩む二人と終生友誼を保ち続けたこと、王明、康生らによる激的な反トロツキーキャンペーンを経た後の一九四〇年代初めまで許志行は王凡西らトロツキー派と交流を保ち、最晩年の魯迅に手紙を書いて「トロツキー派に答える手紙」問題（毛沢東はこれを最大限利用したが）のきっかけを作ったトロツキー派指導者、陳其昌（陳仲山）が上海を後にする許志行の後継者として夜間学校の代講となったことなど、歴史の巡り合わせに「奇縁」を感じないわけにはいかないが、翻って見るにそれは王凡西という証人がいてはじめて歴史の表層に現れたものなのである。

なお、許志行と毛沢東の出会いや解放後の会見についてのディテール（特に解放後の許と毛沢東の会見回数や会見場所など）に関しては、王凡西が引用する許傑の文章も、また王凡西自身の叙述も、現在の資料をもととした本解題とは異なる部分がある。今後の検証が必要な部分もあるが、ここでは、新しい資料に重きをおいて記述した。

最後になるが、本稿で最も示唆的なのは、旧友二人が王凡西に帰国を促す部分である。疑いなく、二人の言葉に底意はない。むしろ感動的な呼びかけである。王凡西はそのことを十分に知っている。しかし、スターリン体制のみならず国民党、中共の現実政治（党内政治を含む）を見てきた王凡西はそれ以上に現実主義を体得していた。個人の善意を越える政治の力学、権力の宿命⁽⁸⁾を王凡西は熟知していた。



図2 王凡西・馬裕生夫妻 1942年上海にて（北京東方出版社版『双山回憶録』より転載）。



図3 王凡西・馬裕生夫妻の墓

王凡西氏は逝去後、英国リーズで荼毘に付され、遺骨は香港の墓園に安置されたが、2007年7月、上海の家族によって当地に建てられた墓に分骨され、遺言にしたがって、後に亡くなった夫人とともに眠る（王凡西氏外孫、薛豊氏提供）。

墓標に曰く、「守望五十六年 重聚在碧雲天 人世雖局促 無悔亦無怨（遠く見守ること五十六年、青雲の空で再びまみえる。この世は限り多く不自由だったとはいうものの、悔いもなければ怨みもない）」と。

王凡西氏は1949年、中共の全国制圧を前に、トロツキー派組織の決定のより香港に出る。その後のマカオ、英国リーズでの亡命生活は2002年末の逝去時まで続いた。馬裕生夫人との結婚は1936年。「五十六年」は王凡西亡命時から馬裕生夫人逝去に到る時間を指す。

王凡西に望郷の念がなかったわけではない。一九九八年十月の訳者宛て書信で、王凡西は「家を離れて数十年、故郷の風景はいつも夢に見ますが、この世で故郷を再び訪う希望はなくなりました」と語っている⁹⁾。しかし、もし、二人の忠告に従ってそれぞれの時期（解放直後と反右派闘争の頃として）に、帰国していたなら、王凡西を待つ運命は火を見るより明らかであったろう。宋雲彬自身の例がそれを物語っている。（革命）政治に関わる者の現実感覚が問われるところであるが、王凡西は十二分にそれを持ち合わせていた。無論、それは個人生活における五十年にわたる亡命生活という大いなる犠牲を王凡西に強いるものではあったのだが。

なお、訳文本文中、（ ）は原注、「」は訳注を表す。長めの訳注は本文のあとに付すこととする。

〔訳者解題〕（注）

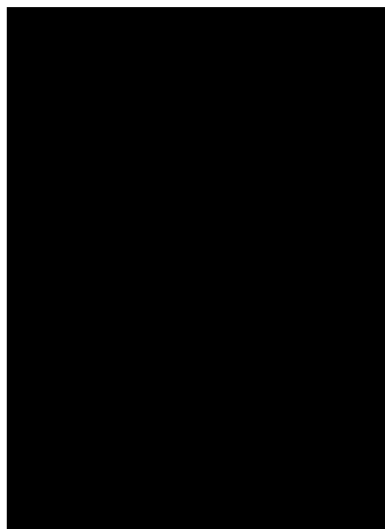


図4 王凡西氏と訳者。2001年9月9日、英国リーズの王凡西氏宅の玄関先にて（山口守氏撮影）。

(1) 「牯嶺之秋」は現行『茅盾全集』（人民文学出版社）第八卷所収。「雲少爺与草帽」「牯嶺的臭虫」は同第十一卷所収。また茅盾の回憶録『我走過的道路』（人民文学出版社、一九八二年初版、一九九七年二版）の一章「一九二七年的大革命」を参照のこと。茅盾回想録の邦訳は立間祥介・松井博光訳『茅盾回想録』、みすず書房、二〇〇二年。また王凡西の盟友、トロツキスト鄭超麟著『鄭超麟回憶録』にも宋雲彬は登場する。長堀祐造・三好伸清・緒形康訳『初期中国共産党群像』1・2、平凡社東洋文庫711・712の巻末人物注と本文も参照のこと。

(2) この略歴紹介は主として息子の宋剣行者「宋雲彬小伝」（『新文学史料』一九九九年第四期）、従として、徐伯鳳著「落紅不是無情物、化作春泥更護花——懷念愛國民主人士宋雲彬先生」（『浙江檔案』二〇〇六年第十一期）によるが、前者の抄訳に近い。他資料に、省局業務処著「宋雲彬日記」（『浙江檔案』二〇〇三年第九期）、劉政著「宋雲彬日記中有關一屆全國人大會議和代表視察的記錄」（『中國人大』二〇〇六年四月二十五日）、宋剣行者「深深的懷念」（宋雲彬著、海寧市檔案館、同市政協文史委編校『紅塵冷眼』、山西人民出版社、二〇〇二年所収）などがある。また、各種人名辭典、文學家辭典も参考とした。

(3) 一九二三年の学制以來、中國の中學には初級中學と高級中學がある。年齢は十二歳から十八歳。戦後日本の中學・高校に相当。詳しくは劉英傑主編『中國教育大辭典1840—1949』（浙江教育出版社、二〇〇一年、參照）。

(4) 許志行については王学平著「毛沢東与許志行的交往」（『党史文匯』二〇〇四年第三期）、『中國文學家辭典』第三卷（四川文芸出版社、一九八五年）

- 及びその他各種文学辞典さらに、許志行著「毛沢東建議去韶山」(「檔案春秋」二〇〇五年第三期、CNKIによる)、「毛沢東的五封信与一個美麗的故事」(新民週刊、二〇〇四年八月四日、こゝでは「人民網」<http://www.people.com.cn/GB/wenhua/1088/2622390.html>)なども参照した。
- (5) 埴谷雄高著『幻視のなかの政治』未來社、一九六三年)、冒頭の一句。次段は以下の如し。「政治の裸にされた原理は、敵を殺せ、の一語につきるが、その権力を支持しないものはすべて敵であるから、そこでは、敵を識別する緊張が政治の歴史をつらぬく緊張のすべてになっているのであって、もし私達がまじろぎもせず私達の政治の歴史を眺めるならば、それがあまりにも熱烈に、抜目なく、緊張して死のみを愛しつづけてきたことに絶望するほどである」。埴谷の本書は主としてスターリン体制批判の書であるが、毛沢東体制にもその批判が適合することは言をまたない。
- (6) 学研版『魯迅全集』第五卷所収の同文の本文と、注、訳注を参照。
- (7) 『双山回憶録』香港周記行出版社一九七七年初版、二二七―二二八頁。なお、同書増訂本、香港士林圖書服務社、一九九四年では、二六二頁。北京東方出版社、二〇〇四年版では二二二頁。日本語版『中国トロツキスト回想録』矢吹晋訳、柘植書房、一九七九年、では一九四頁。ここでは拙訳による。

(8) 注4の埴谷文を参照。

(9) 拙稿「王凡西さんを偲ぶ」(「トロツキー研究」No.40、二〇〇三年春) 参照。

宋雲彬と許志行を思う

二年半ほど前のこと、私は偶然、徐鑄成先生¹⁾が書いた短文「三つの扉」[原題は三扇門²⁾]を読んだ。それは宋雲彬に関する話であった。宋雲彬は私の同郷の先輩であると同時に私の旧友であったから、文革中の境遇と臨終の様子を読んだときには、限らない感慨を覚え、往時の数知れぬ思い出が蘇った。そうした感慨と思い出を少しばかり記しておきたいと強く思ったのだが、年のせいで力は衰え、何度か筆を執ってはまた置くという有様だった。

最近ある友人が、許傑先生³⁾の文章を遠路郵送してくれた。私のもう一人の同郷の先輩、許志行に関する文章である。それは許志行の計報を伝えるもので、許志行青年期の毛沢東との関係を述べ、さらに近年の許志行の状況についても詳しく語るものであった。これにもま

た、深い懐旧の念を覚えた次第である。旧友の姿が改めて私の心中に蘇り、往時のことが一つ一つはっきりと目に浮かぶようで、二人のことを少しばかり書き留めないことには落ち着かなくなってしまったというわけだ。

私の『回想録』の中に次のような一段がある。

「当時の杭州には真の赤色思想がすでに存在しており、……数人の同郷の先輩たちは杭州で国民党（実際は共産党）の活動をしていていた。SY「社会主義青年団」もあり、第一師範には小さな組織もあって、ほかでもない私の幼なじみのHがその組織の責任者であった」（『双山回憶録』第八十九頁参照）⁽⁴⁾

ここで言う「数人」のうちの一人が宋雲彬であり、第一師範のSYの責任者Hとはとりもなおさず許志行その人であった。当時、私が二人の本名を書かなかったのは、あることないことをはったりでごまかそうとしたのではなく、二人の安全のためであった。私がこの回想録を書いたのは一九五七年のことであり、そのころ、宋雲彬はまさに、大いに意見を述べよという政府の呼びかけに答え、本当のことを語ったがために打撃を受けていた。⁽⁵⁾ 私は宋雲彬に「罪の上に罪を加え」させたくはなかった。つまり、「右派」という罪のほかにさらに「トロツキー派匪賊と親しくしていた」というレッテルを貼らせたくはなかったというのである。許志行とは当時音信不通であったが、私はもちろん彼にも面倒をかけたくなかった。

(二)

雲彬は当時（一九二五年前後）杭州で、新聞記者をやり、同時にある生命保険会社でちょっと仕事をしていたようだ。年齢の差が相当あったので（雲彬は私より十四歳年長であったようだ〔実際は十歳の差〕）、私と雲彬との生活は近しくはなかった。顔見知りとはいうものの、友情らしきものがあつたとは言えない。雲彬が「無我」という署名で当地の新聞（『之江日報』⁽⁶⁾）だったか、他の日刊紙だったか今

となつては定かではない）に発表した文章から、私は雲彬が左翼で革命にシンパシーを持っていることを知った。それ以外のことはよくわからなかった。当時、許志行と私との関係はかなり近しかったが、それでも親交があつたとまでは言えない。志行はちょうど一生懸命小説を書いているところだつた。後に、『孤墳』〔訳者解題参照〕にまとめられ出版された数編の小説は、とりもなおさずこのとき、志行が第一師範の蔵書楼に身を潜めて創作したものである。私と志行とは学校が違つたので、顔をあわせる機会は多くはなかつた。たまの日曜日に会うと、志行が革命に傾き、共産主義を信奉しているのがわかつた。当時、私は勉強のための勉強に明け暮れており、志行が授業にも出ずにもっぱら創作に精出し、勉強もせず革命論議にふけるのに、いささか違和感を覚えた。志行が私をどう見ていたのかは知らない。後にも話したことはなかつたが、勉強に専心していると自認していた私のような人間を喜ぶはずがないことは推して知るべしであつた。

志行と私は急に親しくなつたが、それは五・三〇事件が起こつた後のことであつた。私は杭州学連の宣伝部長にさせられてしまい、反帝運動にきわめて熱心になつた。志行と私の思想と行動は次第に一緒になつていった。しかし、この時期は長くはなかつた。ほんの二ヶ月ほど、一緒に工作しただけで、私と志行とはともに杭州を離れた。私は北京に出て進学し、志行は広州に革命をやりに行った。

一年後、一九二六年秋、私は志行のみならず、宋雲彬とも再び顔を会わせることとなつた。広州でのことである。そのころには、私は北京ですでに共産党に入つており、広州に行つたのもほかでもなく、より直に革命に参加するためであつた。雲彬は黄埔軍官学校の日刊の編輯を担当しており、志行とはいえば、国民党中央常務委員会の機密秘書であつた。同郷、旧友にして同志といふこの時の私たち三人の関係は、杭州時代よりもずっと親密なものとなつた。

私と志行とは一緒に住み、しょっちゅう黄埔に雲彬を訪ねてはおしゃべりをしたものだ。当時の雲彬は私に非常に面白い印象を与えた。それまで長袍〔丈の長い綿入れのあわせ。旧時の中国式コート〕を着て、ゆつたりと大股に歩を歩ませていた「雲少爺」〔茅盾が雲彬につけたあだ名「訳者解題参照」〕が突然、軍服に着替へたのである。革のベルトに、布のゲートルながら、相変わらず優雅で、勇ましさは微塵もなかつた。私は雲彬には「儒将「学問があつて風雅な將軍の意」の風格がある」と冗談半分に言つたものだ。当時一緒に黄埔にいた張秋人、蕭楚女らもいつも雲彬の「文武整わざる」ことを冗談の種にした。

広州で三人が集ったのは非常に短く、ほんの一月あまりで私はまた北方に戻った。数ヶ月後、国民党政府は武漢に移り、志行は相変わらず機密秘書の任に当たり、雲彬の方は、軍服を脱いで漢口「民国日報」の編輯者になった。

一九二七年夏、私はまた、武漢で二人と顔を会わせた。私は以前と同じく、志行と一緒に住み、雲彬とはそれほど会うことはなかった。この時、中国の革命運動は正に危機に陥ろうとしていた。蒋介石が寝返り、私たちの希望は「国民党」左派の汪精衛の上に移ったが、この時、汪精衛は日に日に反動化し、共産党に対してますます敵対的な態度を採るようになっていた。国民党中央常任委員会機密秘書として志行が得る情報は、非常に敏速、正確であったから、志行も極めて悲観的になり心配していた。会議の後、志行はしょっちゅう私と、この目前に迫った大きな災難にいかに対処すべきか話し合った。私たちは当時、自分たちの党「共産党」の内部事情に極めて疎く、コミンテルンの政策については、完全に無知であった。革命の敗北は、私たちのような普通の「幹部」にとっては、ある種の自然災害のようであり、予防のしようがなく、説明のしようもなかった。

七月十五日、「左派」国民党が正式に反共に転じて以降、私はソ連に学習に行かされることになり、志行と雲彬は上海に戻って地下に潜った。この時、革命は完全に敗北した。共産党は思想的には混乱に陥り、組織的には崩壊の危機に瀕していた。個々の共産黨員、特に知識人黨員はまさしく茅盾が回想録で言うように、「途方にくれ」、「心を痛め」、「悲観」した。そのなかの浅はかで浮ついた連中は、変節、投降し、国民党と妥協した。比較的深みがあって、真面目な者たちとはといえば、「思索、観察し、分析する時間を必要とした」。こうした人たちは、「革命は一体どこへ行くのか」を問おうとした。

宋雲彬は茅盾と一緒に武漢を離れて牯嶺に行き、それから単独で先に上海に戻った。雲彬の当時の気持ちと考え方はいかなるものであったのか、私には知りようもないが、その後の雲彬の行動から見ると、茅盾とほとんど同じであった。雲彬の共産主義思想の基礎は茅盾よりも浅かったので、革命敗北後、茅盾よりさらに「途方にくれた」はずだ。しかし、雲彬のあの強烈な反抗心と正義感にあふれる性格からして、革命を破壊し、革命者を虐殺した国民党政権と妥協することは決してあり得なかった。また雲彬の昔からの豁達な気質からして、当時彼は確かに「心を痛め」てはいたが、茅盾のように「悲観」してはいなかったと私は信じている。志行と雲彬を比べると思想的基礎が浅いという点では同じであったが、性格上の誠実さという点では志行は雲彬よりもずっと上だった。出身が貧しい階級ということ

もあって、踏みつけにされ、抑圧される者に対する志行の同情には、堅く深いものがあつた。このため、志行は国民党統治者とは一層妥協しようがなかつたのである。

二人は国民党と妥協しようとは思わなかつたが、矛盾同様、共産党に「びったりつき従う」こともできなかった。当時、国内の全政治情況は急激に変化し、共産党は盲目的な武闘路線を採り、国民党は空前の白色テロを展開した。こうした条件下で、数年来の公然、合法的革命工作に慣れてきた知識分子は、その大部分が隊列から落伍せざるを得なかつた。落伍したらどうしたらよいか？ 道は極めて少なかつた。教員、売文という二つのひどく狭い小道のほかには退路がないと言つてよかつた。志行は前者を選び、雲彬は後者の道を歩んだ。もともと、雲彬は生活のために売文しなければならぬというわけではなかつた（茅盾はその回憶録の中で、雲彬についてこう言つてゐる。「家はとても金持ちで「宋家には宋半城」「半城とは町の半分をも所有する地主・富豪の意と思われる」¹¹」¹¹という呼び名があつた」と。これは正確ではない。宋家はわが町「海寧県硤石鎮」では金持ちの部類だつたが、決して富豪ではなかつた。宋家よりも金持ちの家はたくさんあつたが、徐志摩の実家のような富豪の家ですら、「半城」というには足りなかつた）。雲彬が筆を執つたのは、革命参加前も参加後も、ともに生活のためではなく、書くことと文史に対する強い興味のためであつた。雲彬が正式な学校に通つた時間は長くはなく、地元の高等小学校を卒業後は進学しなかつたが、学問に対する興味は終始変わるはことなく、それが彼の生活の主要部分となつた。雲彬の国学に対する基礎は非常に深く、史書の研鑽に大いに勤しんだ。五四運動後、雲彬は新思想の影響を受けて急速に急進化し、わが町の「過激党」となつた。杭州に出てまもなく、雲彬は共産党に入った。その後、およそ三年、雲彬は共産党員の資格で革命に参加したが、行つたのはすべて文字工作であつた。だから、一九二七年の秋から冬に、党との関係が失われて以後、再び昔の仕事にもどり、執筆、創作を続けるようになったのは、理にかなつたことであつた。

(二)

雲彬が上海に戻つてからどんなものを書いたのか私はよく知らないが、私が雲彬と再び顔を会わせたのは一九三〇年のことで、当時私

はトロツキー派になったため、中共からすでに除名されていた。雲彬は上海の閘北区青雲路「現青雲路東段」の旧式民家に住み、商務印書館のために『資治通鑑』に標点を施しているところだった。

このとき久闊を叙した際、私たちが何を話したのか、思い出せないが、私の記憶に残っているのは、初志を貫き革命敗北後も奮闘し続け、ひいては革命のために命まで捧げた何人かの旧友たちに対して、雲彬が限らない敬慕の念を表したことだけである。こうした感情は言葉に出してはつきりと言ったのではなく、かすかな動作と穏やかなニュアンスのうちに見いだされたことだった。党内の分派「王凡西たちトロツキー派を指す」と、その間との闘争については、雲彬もすでに多少聞き知ってはいたが、よくはわからなかったため、どちらにも左袒するすべはなかった。

ほどなく、私は国民党に捉えられた⁽¹³⁾。雲彬は私の家族に大きな同情と声援を送ってくれた。私の長兄は根っからの商人で、政治に口を出すことはなかった。私が捉えられて下獄したことに對して、長兄はよしんば恥とは考えずとも、やはり家門の不幸ととらえ、人前での問題を持ち出されることを恐れ、ひたすら隠そうとし、ひどいことにならないようにとだけ気を遣った。雲彬はこれに大いに異を唱えた。ある付き合いの宴席を利用して、雲彬はわざと私の長兄に獄中の私の近況を尋ね、このようにして入獄するのはなんと名誉なことかと言挙げし、長兄を大いに狼狽させたのであった。

このエピソードは私が一九三五年に監獄から出てきたときに、雲彬が私の「歓迎」のためにわざわざもうけてくれた宴席で聞かせてくれたことだ。当時、雲彬はデイクスウェル路「現溧陽路」の麦加里に住んでいて、開明書店の編集部で働き、多くの文史小品を書いていた。四、五年会わなかったが、私のこの友人はすべて昔どおりで、相変わらず優雅でスマート、義憤を胸に秘め、遊びっぷりも粋だったが、ちょっと変化したところもあった。それはほかでもない、雲彬が中共とかなり密接な複数の外国分子の影響を受けて、中共とトロツキー派間の争いではかなり明確な見方を持っていたことである。雲彬は親スターリン、反トロツキーであった。しかし、そうではあっても、私たちトロツキー派分子に対して以前と同様まったく敵意は持っていなかった。私が生活の困難を解決しようというのを手助けすべく、雲彬は当時、陳望道編の「太白」、黄源編の「訳文」、鄭振鐸と王統照編の「文学」を紹介してくれた。最後には鄭振鐸と話を付けて、私に鄭が主編をつとめる「世界文庫」の一冊、「十九世紀ロシア十大批評家」を編訳させてくれた。こうした売文、原稿販売計画は、ま

るで当て外れのものもあれば、一部実現したものもあったが（ロシア批評家の論文集は編訳が完成した後、原稿の大部分が商務印書館編集部の大火で焼けてしまったので、結果として残りの原稿を生活出版社に渡して『ベリンスキー文集』を出し、「文学」誌上にピーサレフの「プーシキン論」を発表しただけであった¹⁴）。しかし、雲彬のそうした「人の不幸は我が不幸」という積極的な援助の態度には当時もその後も、私は心から感激したものだ。

自分と意見が違うものを排除したり、ひいては政治的見解が異なる者を生活の困難な境遇に陥れようなどというやり方は、雲彬にあってはまったく想像すらできないことであつた。

(四)

当時、日本帝国主義による中国侵略の情勢はますます緊迫してきており、国民党の「国内を平定して外国を打ち払う」という反動的政策は日増しに広範な大衆の不满を呼び、知識分子は急激に左傾し、雲彬もとうとう反故の山から出てきた。雲彬がいつごろ民主派の救国運動に積極的に参加しただしたのか、私にはよくわからない。その原因は、私たちが政治的見解を異にしていたからであり、また一九三七年初め私が再び国民党の特務に捕まってしまったからである。

抗日戦争が勃発して以後、上海、南京が陥落したが、私は幸いにも国民党の牢獄から生還した。そのとき、雲彬は一家を挙げ難を逃れて湖南衡山へ行き、私とは言えば、各地を経由しながら武漢に着いた。雲彬がどうやって私の消息を知ったのか覚えていないが、雲彬はなんと私の見舞いに娘婿を武漢によこし、衡山にしばらく来られないか、と言うのであつた。私は当時、香港を経由して何とかして孤島と化した上海に戻りたいと考えていた。そこで、まず、衡山に行つて、雲彬の家族と半月ほど楽しい日々を過ごした。

私の宋家での世代同定は大変珍しいものであつた。雲彬とはもともと友人であつたが、娘婿の伯寧は私の同級生であつた。そこで、雲彬に手紙を書くときは、「兄「男性友人に対する敬称」」と呼ぶときもあれば、「叔「父と同輩で父より年少の男性に対する敬称」」と呼ぶときもあつた。雲彬の娘の蘊荘はこの目で成長を見てきたので、彼女は私のことを「伯「父と同輩で父より年長の男性に対する敬称、あ

るいは年長男性に対する敬称」と言うのに慣れていたが、彼女の娘も私に対しては「伯」と呼ぶほかに、さもなくば伯寧の位置はおかしくなってしまう。こうした「尊卑分けがたい」関係が、あるいは私と雲彬の家族全員とに親密な感情を終始保たせた、もうひとつの原因かもしれない。

衡山での半月、生活はゆとりあるものではなかったが、精神的には、少なくともこの方面では私はこの上なく愉快だった。雲彬と私は多くのことを話したが、主として抗日戦の政策と前途についてであった。中共の国民党に対する態度については私と雲彬の間の意見の違いは大きかった。私は中共のそれは右過ぎて、第二次革命中の轍「一九二七年の蒋介石による四・一二上海クーデタを指す」を踏むことになるかもしれないと考えた。雲彬は完全に中共の新路線を支持し、延安と毛沢東にこの上ない敬意を抱いていた。雲彬が当時すでに民主党派に参加していたかどうか、私は尋ねなかったし、雲彬も言わなかった。しかし、雲彬はこの時、再び積極的に政治闘争に飛び込むもうとする決意を、非常に明確に示したのである。

(五)

私は湘江の河畔から、黄浦江のほとりに戻り、雲彬一家は日本帝国主義の侵略が深くなるにつれて、あちこちと流浪した。そして最後には、桂林に居を定めた。その後、雲彬と会う機会は二度となく、音信すら不通となり、共通の友人たちの手紙やうわさ話から、雲彬が、桂林で「文化供応社」を主宰し、西南の大後方で抗戦擁護、国民党反対の思想運動を行っていることを知った。抗日戦勝利後、雲彬は多くの左傾分子と一緒に香港にやってきた。国民党が内戦で敗北し、平津「北平と天津」解放「一九四九年一月」前後になってはじめて、雲彬はこれら党外の人士たちとともに華北に潜入し、政協に参加した。全国解放後、雲彬は浙江省に戻って仕事につき、浙江省文教科「現省教育庁の前身」長官となり、全人代の代表ともなった。私の信ずるに、この時、雲彬の気持ちはこの上なく伸びやかであったことだろう。雲彬は決して出世に血道をあげる人ではなかった。旧式の中国読書人の中では、雲彬は閑適放達の一派に入れるべきである。官職などは歯牙にもかけず、権勢に夢中になることもなかった。しかし、雲彬は当時時間違いなく、非常に心奮い立ち、最大限の満足をも

ってこの職位を引き受けたことだろう。長年、切に願って来た革命、雲彬自身もいささか力を尽くしてきた革命がついに成功したのである。雲彬はこの革命のためにさらに多くのことをなそうとした。

私は雲彬が香港を離れたあと、当地にやってきたので、彼の家族には会えたものの、本人には会えなかった。私が出国すると「王凡西が香港に「出国するのは」一九四九年五月」、雲彬はこれを知り、大いに不満だった。大陸に残る私の家族を通じて、雲彬は忠告の手紙をくれた。「外国をさまようことはない、戻って来るべきだ」と。人民日報紙上で、私は偶然全人代会後に撮られた写真を見た。毛沢東が座るすぐ後ろに雲彬が立っていた。雲彬は微笑みながら毛沢東を見ていたが、幸福感と愉快な気持ちに満ち溢れた表情がよく見て取れた。

私は旧友の忠告を聞き入れることなく、ずっと海外に留まった。たぶん、一九五七年の春から夏にかけてのことだったと思うが（時期についてもうはつきりしなくなった）「反右派闘争の公然たる開始は同年六月と言え。王凡西は当時、英国香港政庁によって香港を逐われ、マカオに滞在していた」、ある晩のこと、私はいつものように、ラジオのスイッチを入れ、北京の中央人民放送局のニュースを聞いていて、びっくりしてしまった。宋雲彬が名指しで批判され、「党をあぐどく攻撃する大右派分子」となってしまうのである。その後の雲彬の境遇がいかなるものであったか、私にはまったくわからなかったが、推して知るべしであった。つらい日々であったろう。しかし、結局のところ、どのようにつらい日々を送ったか、二年半前、徐鑄成先生の短い文章を読んで始めて知った次第だ。雲彬は最初のうちこそ、少しは編集の仕事もできたのだが、一九六九年には湖北省咸寧に流され、一九七〇年九月、病状が重くなったため、家族によって、北京に引き取られ、一九七九年に亡くなった。雲彬の娘、蘊莊の「おそらくは徐鑄成宛の」手紙によれば、「今わの際」に雲彬は「胸の三つの扉はかたく閉じている」「三つの秘密、あるいはわだかまりがある、という意か？」と繰り返し言っていたそうである。

衡山でもにも過ごした日々、雲彬が私にスターリン、トロツキー二派の立場の違いをちよつと聞いたことがあったのを覚えている。私は社会主義建設の国際性を述べ、中国のような立ち遅れた国では、たとえ共産党が指導する革命が勝利しても、社会主義建設が一国内に限定されるならば、最終的には勝利できないだろうと話したように思う。スターリン派の一国社会主義の理論と実践とは、必ずや多くの困難に出会い、それによって革命政権は墮落し、反動に変わる。私のこうした意見は、社会科学にまったく興味がなく、延安に無限の信頼を置いていた雲彬にとっては、もちろん素直に聞き入れられる言葉でなかった。雲彬は、王明らが当時トロツキー派を陥れようとした荒唐無稽の罪名を信じたはずはないが、トロツキー派の理論が実際から遊離した空論だとは深く信じていた「魯迅口述とされた」「トロツキー派に答える手紙」参照。

(七)

許志行も今わの際に、心中の扉をかたく閉ざしていたかどうか、私は敢えてやたらな詮索はしないことにする。志行に対する私の理解によれば、志行の心中にたとえわかまりがあつたとしても、その大半は雲彬とは違う種類のものである。二人には共通するところもあつたが、異なる部分はずっと多かつた。

雲彬のお坊ちゃまの身分と違い、志行はもともと貧しい子供だつた。志行は、もとは許姓ではなく、浙江海寧の人でもなかつた。志行は潘姓で、太湖付近の洞庭山の生まれであつた。父親は浙江海寧袁花鎮の許姓の人が開いた小さな店で、仕事をしていた。父は妻が亡くなり、子供の世話をする人がいなくなつたので、志行を袁花につれてきていた。子供は賢く、店主はこの子を婿養子にしようとし、そこで、志行は許姓に変えたのである。この町の小学校で数年学ぶと、この十二、三歳の子供は隣町の同業の小さな店に「商売を学ぶ」ためにやられた。中国の旧式の小商店の丁稚は事実上、一種の児童奴隷であつた。彼らの生活はつらい上、身分は低く、今日の大陸や香港で育つた若い人たちには想像もできないほどであつた。志行が書いた比較的よく知られた小説「師弟」はほかでもなく、そうした悲惨で訴えるすべもない生活を忠実に描写したものである。反抗心に富む志行はまた、五四運動前の中国のあの個人が覚醒しつつある新しい空気が

を多少吸っており、当然ながらこうした生活を我慢することはできなかった。続けられなくなってどうしたか？ 志行の生活のこの一時期の境遇について、許傑先生の文章は次のように描いている。

「志行はこうした丁稚生活のつらさを我慢しきれず、また一方では遠大な理想と断固たる決意から、なんと一人でこの商店を出てしまったのである。そのおかげで志行は一生を左右するドラマチックな出会いをすることになった。志行は浙江を出てから、途中でどこをどういう具合に経由したのか自分でもわからなかったのだが、湖南の長沙に着いた。志行にとって、人も土地もなじみのないこの長沙ではなすすべもなかった。ある晩のこと、志行が一人、線路端で憂い顔で座り込んでみると、毛主席にばったりと出会った。当時、毛主席は長沙にある、湖南第一師範で教師をしていたが、志行の事情を聞くと、湖南第一師範に来て勉強するように言った」（上海新民晩報、一九八四年一月四日所載「憶志行」参照）

許傑先生のこの叙述は基本的に正しい。しかし、ディテールにおいては多くの間違いがある。「ディテールの異同については訳者解題の許志行紹介部分を参照。王凡西の本文と現在の資料との間にも異同がある」。志行の逃亡はこの一回に止まらなかった。志行は何度もよそに丁稚にやられては、そのたびに逃げ帰った。私の田舎の人たちの言い様によれば、志行は「お汁に戻った干し豆腐」「元の木阿弥、の意」になってしまったわけで、このため、志行の家の者たちは大いに頭を痛め、とうとうこの子が逃げられないような妙案を考え出した。志行を数千里「一里は約五百米」も離れた武漢「長沙が正しい」にやるうというのだ。家の者たちは、そうすれば志行だって大人になるだろうと考えたが、その結果はなんと同じで、また逃げ出したのである。しかし、どの道が帰り道で、どうすれば家に帰りつけるのか、志行にはまったく考えがなかった。わずかな金を持ち、南「北とすべき」に行く鉄道の線路沿いをひたすら歩いた。歩きに歩き、ついに長沙「漢口が正しい」に着いたのである。このとき志行は寒さと飢えで線路端に憂い顔で座り込んでいた。ちょうどそのとき、志行は毛沢東というこの「大いなる救いの星」と出会ったのである。毛沢東はこのとき、長沙「の湖南省立」第一師範付属小学校の主任だったので、志行をこの付属小で勉強させた「このディテールも訳者解題参照」。

毛沢東はどうやってこの流浪の子供を見つけ、二人はまたどういう会話を交わし、毛がなぜ志行を第一師範付属小に入れたのか、私はかつて志行に尋ねたことがある。しかし、志行はこの昔話を持ち出されなくなかった。そこで、私もそれ以上は尋ねなかつた。

志行は第一師範付属小では二年ほど勉強したが、すべてを毛沢東が面倒を見た。学校が休みに入っても、志行には帰るべき家もなく、ずっと毛沢東と一緒に暮らしていた。志行は韶山で新年を迎え、事実上、毛家の家族となつたのである。

志行が小学校を卒業したとき、毛沢東はすでに広州に行つており、志行は毛の同意を得て、杭州に戻つて浙江第一師範に進学した。

五・三〇事件が起こると、志行はまだ卒業していなかつたようだが、早速広州に行つて革命に参加した。志行は国民党中央常務委員会の機密秘書という仕事を得たが、私が信ずるに（志行自身は口にしたことはないが）、これも毛沢東が手配したことである。

一九二七年の武漢で、志行と毛沢東一家の關係はまだ非常に親密であつた。志行はしょっちゅう毛沢東に会っているわけはなつたが、楊開慧「毛沢東の最初の夫人、のち一九三〇年、国民党に殺害される」とはよく行き来していた。七月、汪精衛が反共を公にすると、毛沢東は湖南に行き、志行は上海に戻り地下にもぐつた。このとき以来、二人の連絡は絶たれ、抗戦勝利後、毛沢東が重慶に蒋介石と談判に来るときまで、この状態が続いた。毛沢東は重慶の友人のところで志行がその後の長い時間歩んだ道程を聞いた。毛沢東は、志行が上海の開明書店編集部で仕事をしていたことがあつたと知つて、非常に喜んで志行によろしくという言葉伝てを残したため、当時の開明書店の同僚たちは大いに興奮したが、志行は大いにうろたえたということだ。

どうしてうろたえることがあつたのか。許傑先生の文章は、なかなかいい説明をしている。

「おおよそ志行同志をよく知る友人たちはみな、志行同志の背後に毛主席とのドラマチックで幸運な出会いというエピソードがあることを知っていた。しかし、志行同志は自分では瓶のごとく堅く口を閉ざし、いつもこの話を避け、大げさに誇張したりすることはなかつた」（前出文参照）

志行のこうした態度を、慎重ということの説明しようとする人もいるが、実はそうではない。「一九二七年の」革命敗北後、志行が主

として行ったのは、教育の仕事であった。最初は河北省定県で「平民教育」を普及し、後には温州や上海などの地で、中学の教員になった。国民党の反共が猖獗を極めた時期、志行と「匪賊の首魁」「つまり毛沢東」との親密な関係は志行の助けにならなかったばかりか、その身の安全にとつても非常な害となった（温州での教師時代、志行は「反動」言論を理由に逮捕された「共産党のみならず国民党も「革命」を標榜しており、国民党にとつては国民党に反対することが「反動」であった」。幸いにも志行の中共や毛沢東との特殊な関係が露見することはなく、釈放された）。当時は、志行は極力こうした関係に触れないようにしていたから、これを慎重と用心深さのせいだといつてももちろんかまわないが、中共が全国的な勝利を得て、毛沢東が今日の「始皇帝、漢の武帝」¹⁵）となつてからも志行がこうした態度を保ち続けたのは、別の観点、つまり志行という人物の性格と思想から問題を見る必要がある。

志行は決して現代の嚴子陵¹⁶ではない。志行は高尚ぶつたり、人に何かをひけらかしたりはしなかった。逆に、きわめて謙虚で、非常に円満な人柄だった。見た目にはあか抜けず、朴訥で不器用だった。しかし、心のうちは時として熱情火のごとくで、今にも爆発しそうであり、また時として「水のごとく優しい心」で、必要以上に、時世のつらさを嘆き、人民の苦しみを哀れんだ。志行はすべての無告の弱者たちと自己を同一視すると同時に、いかなる権勢とも「疎遠」であり、あらゆる抑圧に反抗した。広州時代から武漢時代までずっと、志行は国家の最高レベルの人たちと接し、毎日蒋介石や汪精衛といった人たちと会議を開いて打ち合わせをしていた。一九二七年以降、高級知識人のうちに身をおいて、「士大夫との交友」をするようになった。しかし、私の観察によれば、志行はこうした高官、貴人ばかりでなく、有名人や学者たちとも感情の上で融合一体化することはなかった。志行は一庶民であり、生活面でも精神面でも間違いなく庶民であった。すべての「選良」、欧文でいうところの elite、政、財、軍の者であれ、思想、学術界の者であれ、志行はそうした者たちとは相容れなかった。仕方なく、こうした人々の間にはいたが、志行はどうしてもなじめず、気詰まりで落ち着かなかったようだ。しかし、ひとたび別種の人たち、たとえば、田舎から来た貧しい親戚・友人、先生を訪ねてきた若者、近くの店の若い店員、工場の作業場で働く労働者、あるいは志行と同じ中学校、小学校の教員や無名の作家などの中に入ると、私は志行がまったく違う人間に変わってしまうことが気がついた。よく話し、よく笑い、心地よげで、まるで水を得た魚のようであった。

志行はいつも自分は凡俗な人間だと言っていた。「俗」ということについて言えば、あるいは少しはそういふ点もあったが、「凡」とい

うことについて言えば、決してそうではなかった。権勢や利得に屈せず、権勢や利得がいかなるものかをまるで知らない者がどうして凡俗たりえるだろうか。生まれながらにして最も凡俗でない性格の人であってはじめて、心の底から且つ本能的に、自ら思わずして、富貴を見ること浮雲の如く、権勢を見ること糞土の如く、という具合にできるのである。

革命理論について志行は雲梯同様、「甚だしくは解するを求めず」「陶淵明の「五柳先生伝」に、「好読書（書を読むことを好めど）、不求甚解」とある」であつたと言つてよい。二人が革命に参加し、共産党に入り、「落伍」「四・一二クーデタ後、党との關係を失つたことを言う」後も相変わらず共産党に従つて、国民党に反対したのは、思想や理性的な認識からと言うよりは、感情つまりは感情に発する反抗と同情からであつた。だから、二人は深みのある共産主義者ではなかったが、教条主義とセクト主義の過ちは犯さなかったのである。志行は私がトロツキー派であり、そのために党を除名されたことを知つた後も、スターリン、トロツキー両派の異同がどこにあるのか、知ろうとはしなかった。たまたま顔を会わせて話す際、この方面に話題が及ぶと、志行はただ首を振つて嘆息し、「調停者」の願いをいささか表明するのであつた。

(八)

一九三八年春、王明、康生は中国トロツキー派に反対し、とりわけ陳独秀に反対する大キャンペーンを發動し、陳独秀が日本帝国主義者の金を受け取つて日帝の中国侵略を助けていると言ひ張つた。このとき、私と志行はちょうど上海にいて、志行は開明書店で仕事をしており、私の方は孤島「第二次上海事変（一九三七年八月）から太平洋戦争開始時に到る、日本軍占領以前の孤立化した上海租界を指す」に「隠棲」して翻訳をしていた。この反トロツキー派キャンペーンは延安から武漢に広がり、さらに武漢から上海に波及したが、志行はこのときばかりは非常に興奮した。志行は共産党を信じ、毛沢東を信じていたが、トロツキー派の私、それに私を介して知り合ひになつた他のトロツキー派メンバーと相当親しく交際していた。志行が直接接していたところによれば、トロツキー派が漢奸「民族の裏切り者、売国奴」だとはどうしても信じられなかった。志行はその目で、私たちトロツキー派の生活が彼自身の生活よりも苦しいのを見て

おり、トロツキー派が日本人から金をもらっているはずは断じてなかったのである。志行は王明のデマと中傷を決して信ぜず、私たちとの交際を続けた。

一九四一年冬か一九四二年の春、志行は上海を離れ、内陸部に行つて教師をする決心をした。当時志行は開明書店の仕事のほか、上海のある夜間学校で国語の教師をしていた。時期が学期中のことだったので、この学校を放つて去るわけにはいかず、誰か代わりを捜さなければならなかった。そこで陳其昌に代講を頼んだのである。

陳其昌とはとりもなおさず、この数年前「一九三六年六月のこと」、魯迅に手紙を書いてトロツキー派の主張を説明しようとし、魯迅の「返礼」を受けたあの「陳仲山」のことである。¹⁷魯迅は陳仲山とその他のトロツキー派が「中国人の道徳に背くところがある」と書いたが、このレットテルはこのとき、明らかにまだ志行の同意を得るに到っていなかった。志行はこのトロツキー派を信じ、あとに残る教育上の責任を陳其昌に引き渡したのである。

陳其昌はほどなく、日本憲兵に捕まつた。この公然たる職業を手がかりに、夜間学校の校長も日本憲兵によって「ご同行」を願われた。憲兵司令部でこの校長は、全身傷だらけで顔中に白い布を巻いた（両の目だけが出ていた）人が憲兵に抱えられて出てくるのを見た。相手は彼にこの校長も同じ仲間かと聞いた。「顔中白い布の男」は懸命に首を横に振つたので、校長は釈放されたが、陳其昌本人は後に秘密裏に処刑された。

こうした情報は抗戦勝利後、志行が上海に戻ると、校長が志行に語り、さらに志行が私たちに教えてくれたことだ。¹⁸

(九)

全国解放後、私と志行との連絡は完全に途絶えた。志行の状況については、ときたま国内の親戚、友人からの手紙でわずかに知るのみであった。許傑先生の文章も私たちにいささか教えてくれるところがある。

「……解放後、志行は毛主席に手紙を書いた。毛主席は一度志行を北京に來させたが、志行が長年教學に専心し、學生たちが正しい道を歩けるよう啓発していることを知って、志行に、安心して本来の仕事をやリ遂げ新世代の青年たちを教育するよう言いふくめた。志行は北京から帰つてのち、以前にもまして心奮い立たせ、相変わらず國語教育の事業に従つたのであつた」(前掲文参照)

しかし、国内の親戚、友人からの手紙で知つたことには、解放後、毛沢東はこの「貧しい時代の友人」を招待したのは、一度ではなく二度であるようだ。最初は北京に招かれ、次は毛沢東に従つて北戴河に避暑に行った。¹⁹二度目の招待では二人はかなり長い時間ともに過ごし、別れの際、毛沢東は自分の「印税」から五百元を取り出し、旧友に贈つたということだ。

志行が私にくれた最後の音信はちょうどこの「避暑」²⁰から帰つたときのことである。志行は人を介して私の家族に言付けてきた。私の家族に、何とかして私に手紙を書いて、こう伝えるようにと言つてきたのである。「歸つてこい、歸つてきても問題ない」と。

この言葉はまったく真に迫つていて、読むと志行の声が聞こえ、その姿が目に見え、歸つてきても問題ない。言うまでもなく、私は志行の好意を深く感じ取つた。しかし、ちょうどこれよりかなり前の雲彬の忠告を聞き入れなかつたように、私はこの時も志行の忠告を聞き入れなかつた。私は相変わらず海外をさまよつていたのである。

一九八四年四月二十八日 摺筆

(香港××雜誌轉載、削除部分あり)²¹

(注)

(1) 一九〇七〜一九九一。ジャーナリスト、新聞學者。江蘇宜興の人。一九二〇年代末から一九八〇年代まで「大公報」、「文匯報」で高位の編集者として活躍。著書に『報海旧聞』、『旧聞雜憶』、『旧聞雜憶統編・外編』また湖北人民出版社の叢書「改変那個世紀的人和事」の一冊「親歴一九五七」に、同名の文章が収録されている。

(2) 一九八二年秋頃の文章と思われるが、書誌とタイトルの意味は待考中。「三つの扉」が何を指すかは不明。徐の文章が入手出来ればヒントが得られるはずだが、慶應義塾図書館所蔵の徐の単行書や、CNKIでは入手出来ず、今はこのままとするほかない。中国語を母語とする複数の有識者の意見

- によれば、「人に言えないような三つの事柄(秘密)」ということだが、やはり徐の文章を見ないことには「三つの事柄」が何かは判然としない。
- (3) 一九〇一〜一九九三。浙江天台の人。小説家、教授。文学研究会会員。一九二〇年代初から小説を発表。農村小説に優れた作品を残す。一九三〇年代、中山大学、上海暨南大学教授、解放後は復旦大学、華東師範大学教授、魯迅研究学会会長を歴任。著書に小説集『慘霧』、『飄浮』、『暮春』、評論に『魯迅小説講話』など。
- (4) 『双山回憶録』香港周記行出版社一九七七年初版、八〇九頁。ここでテキストが八十九頁とするのは誤り。なお、同書増訂本、香港士林圖書服務社、一九九四年では、十九頁。北京東方出版社、二〇〇四年版では八頁。後二者のテキストでは、情勢の変化を受け、「H」は「許志行」と実名表記に変えられている。日本語訳『中国トロツキスト回想録』矢吹晋訳、柘植書房、一九七九年、では十三頁。ここで訳は拙訳。なお、日本語版が「SYもその一人で」と訳するのは誤りで「SY」は The Socialist League of Youth (社会主義青年団) を指すことはこの王凡西の文からも明らか。
- (5) 毛沢東の中共政権はソ連共産党によるスターリン批判の余波を受け、一九五六年に百花齊放・百家争鳴という一種の言論自由化政策を採るが、党内外からの批判のあまりの厳しさに翌年、一転して反右派闘争を展開、批判者たちを右派として断罪した。
- (6) 之江は、浙江最大の河川、錢塘江の別称。杭州付近で「之」の字に曲がるためこの名がある。
- (7) 『双山回憶録』の第一章「五四与五卅(五・四と五・三〇)」によれば、王凡西は最初、浙江省立第一師範に隣接する省立甲種商業学校に入学、二年次の第二学期に学校紛争で退学、別の私立中学に転校している。この私立学校の名は回憶録にはないが、訳者が二〇〇〇年に北京大学档案馆で調べた資料によると、王凡西の「経過学校」は「浙江安定中学畢業」[卒業]とある。本紀要 No.37 所載拙訳「胡風遺著読後感」[訳者解題]の注2を参照。これをもって記載が不十分な同注の補注とする。
- (8) 一八九八〜一九二八。浙江諸暨の人。中国社会主義青年団を経て中共入党。上海の中共指導部に参画、一九二五年の非キリスト教運動の指導に当たる。一九二六年以降、広州で「政治週報」主編、黄埔軍官学校政治教官などを歴任。一九二七年、大革命敗北後は中共浙江省委書記。同年逮捕され翌年処刑された。
- (9) 一八九三〜一九二七。湖北漢陽の人。五四運動参加を経て、一九二二年中共入党。一九二五年、上海で惲代英と共同で「中国青年」主編となる。一九二六年以降、広州で「政治週報」主編助手、国民党中央農民運動委員長、黄埔軍官学校政治教官などを歴任。一九二七年、四・一二上海クーデタに呼応した、広州での四・一五政変で逮捕、殺害された。
- (10) この段の後の「」内の引用は茅盾回憶録「我走過的道路」(訳者解題)注1参照)の「創作生涯的開始」冒頭部分、同書二版では三八二〜三八三頁から。日本語版『茅盾回想録』(立間祥介・松井博光訳、みすず書房、二〇〇二年)「十三、作家生活の開始」の冒頭部、三五九頁。ここでは拙訳による。
- (11) 邦訳版『茅盾回憶録』三五七頁(人民文学出版社版では三八一頁)にある「半城」の訳注がこれを「上海城の半分」と解するのは不適當ではないか。ここで言う「家」とは宋雲彬の郷里である硤石鎮の家のことであろう。王凡西が硤石鎮の同郷、徐志摩をここで持ち出すのも郷里の「家」と理解して

いるためである。従って「硤石鎮の半分」という意味にとるのが適切であろう。

(12) 原文は「統廂房」。「上海掌故辞典」(上海辞書出版社、一九九九年)によれば、上海の石庫門と呼ばれる旧式の民家建築は一九二〇年代以後、西洋建築の影響を受け、新石庫門へと変化する。その多くは二階、三階建てで各階「三進」つまり「一客堂(客間) 二廂房(部屋) 三進」であった。玄関を入ると中庭(露天の空間)があって、その奥に客間、客間の両側に東西の「廂房(部屋)」があり、客間のその奥にはさらに中庭があってその両側には東西の「後廂房」があったという。階上も基本的に同じ構造。これから先は、上海出身の方からの聞き書きであるが、「廂房」と「後廂房」が一つながりで使用された場合、「統廂房」と言われたようである。また同上辞典によると、一九三〇年代上海の住宅事情は悪化し、家主は空き部屋を貸部屋として貸し出したと言う。

(13) 『双山回憶録』によれば、王凡西は中国トロツキー派四派の統一がなった直後の一九三一年五月二日、国民党特務によって逮捕され、六年の刑を受けたが、一九三四年末に釈放された。その後、一九三七年五月にも逮捕され、十二月まで獄中生活を送った。

(14) 本紀要 No. 53 所載「胡風遺著読後感」。「訳者解題」の注5にも記したが、茅盾が実質的編集者(「簡明茅盾詞典」、甘肅教育出版社、一九九三年、による)で魯迅も編集者に名を連ねた雑誌「文学」の第八卷第三・四号(一九三七年三月、四月)に、ロシアの批評家ピーサレフ(壁沙了夫)作「プーシキンの抒情詩(普希金底抒情詩)」という作品が王凡西訳で掲載されている。本テキストでは「沙了夫」と記されているが、これは誤り。ここでは早稲田大学図書館所蔵の「文学」のリプリント版を参照した。「胡風遺著読後感」。「訳者解題」の注5では「ピーサレフの作とおぼしき」と書いたが、今回はピーサレフの作と確認した。なお、同注で茅盾の政治的スタンスについて触れたが、その際、筆者は茅盾が中共黨員であることを前提としていた。しかし、今回、茅盾研究者で横浜国立大学教授・白水紀子氏にご教示頂いたところでは、茅盾は一九二七年夏に党籍を失って以来、その死まで党籍を有しなかったということだ。白水紀子著「東京滞在時期の茅盾」(『アジア遊学』No. 15、二〇〇〇年二月)参照。また『茅盾全集』附集の「茅盾生平著訳年表」(三六六〜三六七頁)には「一九二八年以後、茅盾は党との組織的関係を失い、臨終の際、茅盾は中共黨員の資格を追認するよう要求し、中共はこれを承認して、一九二二年に遡って党歴を起算する」とある。

(15) 毛沢東は一九三六年作の詞「沁園春 雪」で自らを暗に始皇帝、漢の武帝を越える英雄とする。武田泰淳・竹内実著『毛沢東その詩と人生』(文藝春秋、一九六五年)は、異なる解釈で、この詞が比する対象を(毛沢東自身を含むであろう)「現代の革命的人民大衆」とする。

(16) 後漢の隠士。若い頃、後の光武帝と遊学したが、光武帝即位後は官職を断り、隠棲した。後世の人々はその高尚な人格を尊崇した。『後漢書』巻八十三「逸民列伝第七十三・嚴光」参照。

(17) この問題については拙稿「トロツキー派に答える手紙」をめぐる諸問題」正統、『日本中国学会創立50年記念論文集』(汲古書院、一九九八年)及び『蘆田孝昭教授退休記念論文集 二三十年代中国と東西文芸』(東方書店、一九九八年)参照。「トロツキー派に答える手紙」は魯迅口述の作ではなく、馮雪峰の執筆であったことが判明している。

(18) 陳其昌の遺児、陳道同による「陳其昌之死」(『魯迅研究月刊』二〇〇一年第四期、邦訳は拙訳「陳其昌の死」、『中国研究月報』二〇〇二年四月号)

によれば、陳其昌の家族にその死を知らせてくれたのはこの校長とは別人のようである。

(19) 「北戴河行き」については他資料には基本的にはない（ごく一部のインターネット掲載資料にはないわけではないが）。五百元の印税「原稿料」を毛沢東が許志行に与えた件も、「訳者解題」注4所載の資料群は「韶山行き」を勧めて渡したとする。北戴河と韶山が混同されて風説が流布した可能性も考えられるが、断定はできない。なお、同資料群から許志行の北京滞在は一九五七年六月二日から七月二日、長沙・韶山滞在は七月九日から一八日頃とわかる。ちょうど反右派闘争開始直後ということだ。毛沢東の許志行招待の手紙は『建国以来毛沢東文稿』第六冊（中央文献出版社、一九九二年）に二通収められているほか、さらに一通が同書第四冊所収。このほか、一九四九年十月二五日付書信があるが、この時期をカバーする同上『文稿』第一冊には未収録。同前資料群から、許志行は文革で没収されるまで、毛沢東からの五通の親筆の手紙を有していたと言うから、このほかにも未収録の一通があるはずだが未見。

(20) この「避暑」が実際、「北戴河」への避暑であるとする、許志行の王凡西への帰国懇愿の言付けの時期は「訳者解題」の推測とは異なることになる。「北戴河」行きがあったとすれば、その時も「五百元」を餞別として許志行に渡したのかも知れない。「訳者解題」でも書いたとおり、王凡西の帰国問題を毛沢東に持ち出し、色よい返事を得て、ことづけまでするというのは、反右派時期には考えにくいからだ。但し、許志行の性格からしてあり得ないことではないというのも、本文前述のとおり。この問題はもう少し調査を要しよう。

(21) この部分は海寧版テキスト編者の注である。